

子どもは「育てられて育つ」：関係発達論再考のために

中京大学 鯨岡 峻

1. はじめに

「鯨岡理論の現在」などというテーマでの集まりに、どの面下げて顔を出せばよいか、とまどう気持ちが強い。テーマの主旨に沿った議論は、後から登壇する方々がいろいろに語ってくださるだろうから、このテーマに関しては、私は「まな板の鯉」に徹して、私の持ち時間はいまの私の関心事を述べることでお許しいただきたい。

2. 「育てる」営みへの回帰

いま私は保育の世界にはまっている。2年前に保育所保育指針との関連で、全国私立保育連盟から委嘱を受けて「提言」を書いたことが大きなきっかけになっている。その提言の骨子は以下のようなものである。

「保育の場は、子どもたち一人ひとりが、周囲から主体として受け止められ、主体として育っていく場である。そして保育は、それぞれが主体である保育者と保護者が共同して子どもを育てるという基本姿勢の下に営まれるものである」

僅かこればかりの文言に、保育の、そして「育てる」営みの本質が凝縮されていると思っているが、それ以来、保育の世界に深く入り込むことになった。

一つは、保育者の「子どもの主体としての思いを受け止め、自らの主体としての思いを返す」という保育の最も大事な部分は、まさに本人にしか分からない目に見えないところである。それゆえ、そこをエピソードに描き出すしか、その営みの機微を他者に伝えることができない。そしてそのようにして描き出されたエピソードを皆で読み合うことによって、保育の中身を吟味することができ、よりよい保育へと繋げることができる。こういう問題意識から、全国的にエピソード記述の研修会が広がっていったことである。ここから、これまで学問の立場で「エピソード記述」を問題にしていたのとは少し異なる、新しい問題関心が切り開かれてきた。保育者の描くエピソード記述から、「育てる」営みへともう一度回帰してみようという気持ちが強められたのである。

二つ目は、京都市の保育所の巡回指導を引き受けることを通して、保育の実情を目の当たりにし、子どもたちに直接接するという、京都大学時代に少し薄らいでいた現場感覚に立ち返ることができたことである。これも「育てる」営みへの回帰する動機となった。

3. 学問の土俵での議論と現場の生の実相との乖離

保育現場に深く入り込むにつけ、学問の土俵での議論と生きた現場の生の実相とが乖離しているという、以前から私の問題意識としてあったものが、より先鋭なかたちで浮かび上がってきている。院生諸君や研究者の論文上の議論が何とも空疎に響いてしまうのである（失礼！）。エピソード記述はまさに「生の実相」に迫ることを目的としているが、自分の描いてきたエピソードも含め、やはり学問の立場で描くエピソードは「底が知れている」というのが（これも失礼！）、保育者の描くエピソード記述に接して思うところである。

4. 関係発達論の再考に向けて

保育現場に入り込むなかで上記のことを考えるようになった矢先、「教育と医学」に関係発達論についての連載を依頼された。これは、これまでの著書に表してきたものを批判的に読み直す絶好の機会であった。従来の「<育てられる者>から<育てる者>へ、<看取る者>から<看取られる者>へ」という人の生涯発達過程に重心を置いた関係発達論は、振り返ってみれば、「私の生涯発達過程」を説明する図式であったと思う。そこから、「育てる」営みへの回帰という今の関心に沿って関係発達論を再考してみる必要（というか、その方向に向かおうという意欲）が生まれた。この関心の中心に来るのが「子どもは育てられて育つ」というテーマである。

言い換えれば、「子どもから大人へ」という従来の個体発達図式を「<育てられる者>から<育てる者>へ、<看取る者>から<看取られる者>へ」と関係発達図式に置き換えたように、「子どもは発達する」という従来の個体能力発達図式を「子どもは育てられて育つ」という関係発達図式に置き換えて議論しようということである。

以下に「教育と医学」での議論を簡単に紹介することを通して、この試みの一端に触れ、また保育者の描く 4 つのエピソードを通して、いまの私の問題関心の所在を明らかにしてみたい。

5. 関係発達論の概念図の修正とその解説（その1）

まず、これまで多数の著書の中で「関係発達論の概念図」として示してきたものの修正が図られている。以下の（1）から（4）までは、語り口は少し違っているが、基本的には従来の考えを再録したものであるから、ここではこれは取り上げない。問題は、6 の関係発達論の概念図の修正と解説（その2）である。

（1）命の世代間連鎖

図1はまず、前の世代から命を引き継いで誕生した個が次世代に命をバトンタッチするということの反復、つまり命が世代から世代へと連鎖していく事実を描き出している。この図には3世代しか描かれていないが、親の親にはそのまた親がいるというように、この図は左下にどんどん伸びていくし、もしも子どもの世代が次の世代に命を引き継げば、この図は右上に伸びていく可能性があるというように、決して3世代に閉じたものではない。

振り返ってみれば、誰ひとりとして自分ひとりの力でこの世に生まれてきた者はいない。両親に育てられたかどうかはともかく、みな両親から命を引き継がなければ（親から命をもらわなければ）この世に生まれ出てくることはできなかった。この図1に読者自身、自分を当てはめてみれば、誰もがそのことに気づくはずである。今の若者が「オレの人生、どう生きようとオレの勝手だろう」と息巻いたり、「シングルがかっこいいから、私もシングルで行く」とシングル教への帰依を表明したりするのを耳にすることはしばしばあるが、その彼らも例外なく、この図に否応なく位置づけられてしまうのである。

一人の人間の誕生は、命の世代間伝達という意味を不可避免的にまとい、誕生した子どもを取り巻く先行世代の人たちの（親や親の親の）生涯発達過程を揺るがさずにはおかない。一人の人間の誕生は、個の誕生をはるかに越えた、いわば関係論的意味をもつのである。

同じことは一人の人間の死についてもいえる。その死を看取る者に影響を及ぼさないような人の死というものは考えられない。命が世代間で順繰りに伝えられていくのと同様に、

死も世代間で順繰りに迎えられていくのである。一人の人間の誕生が個の誕生であると同時に個にのみ現れた現象ではなく、その個を取り巻く周囲の人々をも巻き込んだ現象であるといま述べたのと同じ意味で、死も個にのみ現れる現象でないこと、つまりその個を取り巻く世代を巻き込んだ出来事として関係論的に考えられるのでなければならない。その意味では、命の世代間連鎖は、死の世代間連鎖を暗に含むものだといえる。これがまず、図1から読み取られるべき点である。

（２）個の生涯発達過程の基本構造

さらに図1の親の世代に注目し、親の世代を表す線を左に辿れば、親もまた前の世代の親から命を引き継いで誕生した事実に行き着く。これを起点にその線を右に進めば、前の世代から命を引き継いで誕生した個は、成長を遂げて大人になり、カップルをなして次の世代に命を引き継ぎ、誕生した次の世代を育てつつ自らの生涯発達過程をさらに進行中であることが読み取れる。そして次の世代が成長を遂げて成人する頃、自分を育ててくれた前の世代の介護にかかわり、最終的にはその世代を看取るときがやってくる（この図では親の親を看取るのはこれからになっているが）。そしていずれ次の世代が次の次の世代に命を引き継げば、自分は祖父母の立場に移行して、今度は自分自身が次の世代に介護を受け、看取られて、その生涯過程に終止符が打たれるときがやってくるという事情が見えてくる（親の世代から見れば、孫が誕生してそれまでの親の立場から親の親の立場に移行するとき、この図の楕円全体が1世代上に移動すると考えればよいだろう）。これが一人の人間の生涯発達過程である。

言い換えれば、一人の人間の生涯発達過程は、誕生から30年前後の<育てられる者>の位相、その後の30年前後の<育てる者>の位相、そして前の世代を<介護し看取る者>の位相を経て、<介護され看取られる者>の位相に辿り着き、終焉を迎えるという一般的な構図の基にあることが分かる。この構図は自分自身に当てはまるだけでなく、自分の親の世代（つまりこの図1の親の親の世代）にも、また自分の子どもの世代にも当てはまるのであり、そのように見れば、人は誰もおよそ80年の人生をそのようにして潜り抜けていくのだという人の生涯発達過程の一般的な構造が展望できる。

（３）人生のコペルニクスの転回

さて、図1の親の世代や親の親の世代の線分が誕生から右に進んできて「親になる」ところでくると一回転して少しずれた軌道を進む経緯を説明しよう。図1に描きこんでるように、それまでのところを<育てられる者>の位相、それ以後を<育てる者>の位相と見るとき、この転回を挟んで<育てられる者>から<育てる者>への転換がなされていることが分かる。これは人生上の単なる区切りといったのではすまない、むしろその人にそれまでの人生にはなかった新しい生活を迫る、いや生活のスタイルそのものを大きく変えることを迫る、人生における最も大きな転換点だということを表現したものである。

私の妻は、最初の子どもが誕生して新米ママの生活が始まって間もない頃に、「これは私の人生におけるコペルニクスの転回だわ」とため息混じりに語ったことがあった。それは新米パパが頼りないことへの失望も含んだ妻の実感だったに違いない。しかし新米パパとなった私にも、程度の差や重みの違いこそあれ、この「コペルニクスの転回」という実感はあった。その頃の私の体験が妻の「コペルニクスの転回」という言葉と合わさって、ここで線分をくると一回転させることになったのである。

いま、若い親たちが子育てに悩み、なかなか<育てる者>になれない現状も、この図1に照らせば、このコペルニクスの転回を身に引き受けることが一般に難しいことなのだというふうに理解することができる。この転回の困難を支援するのが本来の子育て支援なのであり、単に子育ての肩代わりがその支援の意味ではないことも、この図をみれば理解できるのではないだろうか。またこのコペルニクスの転回の困難な事実の中に、場合によっては虐待へと通じる危険も孕まれていること、それゆえ虐待という事象が特別な人に起こる問題なのではなく、誰にも起こる可能性のあることだということも見えてくるのではないだろうか。このコペルニクスの転回の困難については、次回でも別の角度から取り上げてみることにしたい。

ともあれ、この図に示されるかたちで個の生涯発達過程を捉えれば、子どもが成長を遂げるとき、親もまた親として成長を遂げること、そしてその親としての成長は、子どもの成長と同時進行し、子どもの成長によって親の成長が促される面があるという点では、親が子どもによって育てられる面があることも分かるだろう。親はもっぱら子どもを育てる存在なのではなく、子どもを育てる営みを通して、一人の人間として、つまり社会に生きる人間として育てられる存在でもあるのである。

（４）「育てる－育てられる」関係の世代間循環

変更を加えられる前の図では、図1の楕円は一重で、外周の楕円は省かれていた。今回はこの内側の楕円の内容を解説しておきたい。この内側の楕円に注目するとき、そこには子ども、親、親の親、という3世代が楕円で括られ、それぞれの間で同一化の矢印が双方向に向かっているのが見て取れる。これを親の世代を中心に見れば、親は子どもから同一化を向けられるとともに、子どもに同一化を向けているということである。親と親の親は、元々は子どもと親の関係であるから、そこにも双方向の同一化の矢印が描きこまれている。つまり親は、子どもと親の親に挟まれ、同一化の矢印が「向ける－向けられる」というかたちで4重になっている事情が見て取れる。これはいったい何を意味するのだろうか。

親になってみると、わが子は単なる子どもではなく、わが子の今の姿をみて、親は「自分にもきつとこのような姿があったに違いない」というふうに、かつての自分の幼い姿を想像し、そのイメージを重ねてわが子を見るという不思議な経験が折々に生まれる。そのとき、目の前の子どもがかつての私ならば、今の私はかつての自分の親だというように、不思議な世代間の入れ替わりが起こる。これは私自身の経験の中で大きな驚きとして迎えられるものである。

親のようにになりたい、親のようになりたくないという、子どもが親に向ける同一化や反同一化（裏返し同一化）については、私自身、子どもの頃に何度となく経験していた。しかし子どもの頃に、私の親が私の中にかつての自分を見るかたちで同一化を向けていたとか、自分の果たせなかったことを私に期待してそのような思いを振り向けていたということなど、ついに気づかずにきてしまっていた。だからこそ、その世代間の不思議な入れ替わりを驚きをもって迎えることになったのだと思う。

わが子の様子に引き込まれ、自分にもこういうときがあったのだと同一化を向けた瞬間、その私の思いを私の親もかつてしていたに違いないと思い始める・・・そこから「育てる－育てられる」という関係が同一化（あるいは反同一化）を挟んで世代間で順繰りに循環していくという考えが自ずから導かれてきた。「親になって初めて自分を育ててくれた親の

ありがたみが分かる」と昔から言い伝えられてきたことが、私自身に一つの体験として生じたということである。

してみると、この楕円内の三世代が同一化を向け合う関係こそ、一人の子どもが「育てられて育つ」ということの意味、一人の親が「子どもを育てることで育てられる」ということの意味だということが見えてくる。

しかしこの双方向の同一化の矢印を向け合う世代間の関係は、常に幸せな関係を保障しない。同一化するからこそ、腹立たしさや怒りがこみ上げてくる場合があるのであり、そこに親子関係が常に幸せを約束するものではなく、むしろ常に葛藤を孕み、時には精神病的な事態に陥る可能性さえ生まれるという理由がある。というよりも、親子間の葛藤する関係を視野に入れて、さまざまな具体的な臨床的問題を捉えようとするからこそ、関係発達を論じなければならなかったのである。この点については、後に詳しく取り上げることになるだろう。

以上がこの概念図の概略の説明である。しかしながら、弁解めくけれども、この概念図は図のもつ一般的な制約として、現実をうまく掬い取れていないところがある。この図はあくまで、各世代間の生涯発達過程が「育てる－育てられる」という関係で結ばれつつ同時進行するさまに焦点を合わせたものに過ぎない。それによって、命の世代間連鎖や死の世代間連鎖が見え、<育てられる者>から<育てる者>へのコペルニクスの転回や、<介護し看取る者>から<介護され看取られる者>への移行が見えてきたのは確かである。しかし、子どもは「育てられて育つ」とテーマに目を向けなおし、「育てる」という営みに密着しようとしてみると、この図の抽象性が改めて浮き出てくる。次回はこの図に加えられた第2の変更点を中心にこの図が抱えている制約を示し、「育てる」という営みに密着したとき、この図をどのように読み取ればよいか、この図に描きこまれていないいくつかの点を考えてみることにしたい。

6. 関係発達論の概念図の修正とその解説

(1) 広義の<育てる者>たちの影響という視点

前回に示した「関係発達概念図」の変更点の二つ目は、子どもの世代、親の世代、親の親の世代の三世代を取り囲む楕円の外側を、もう一つの楕円（広義の<育てる者>たち、つまりきょうだい、保育者、教師、近隣の人や親類縁者たち）が取り囲んでいるところである。従来の図は「育てる－育てられる」という世代間の関係を強調するところに主眼があった。それによって、命の世代間連鎖、死の世代間連鎖が見え、一人の人間の生涯過程のあらましが「人生のコペルニクスの転回」とともに見えてきた。

だが、一人の子どもの「育てられて育つ」過程により密着して考えるとき、その生涯発達過程の実相を捉えるためには、三世代の世代間関係を取り上げるだけでは明らかに不十分である。この点をもう少し詳しく見てみよう。

1) 親子の関係は基本的には三者の関係である

まず第一に、「親」という表現は、子どもから見れば、基本的には「二人の親」（両親）であり、「親の親」は「四人の祖父母」である。つまり、前回の図で一本の線で表現されていた「親」は、より正しくは、始点が僅かに違う二本の線（両親それぞれの生涯過程）が

圧縮されたものと考えられなければならない。また<親の親>の線も本来は四重線が一本に圧縮されて表現されたものと考えられなければならない。

親子の関係は、それゆえに二者関係が中心なのではなく、むしろ基本的には子どもと母親と父親という三者の関係が中心と考えられなければならない。たとえ、離婚や死別によって単親家庭になったとしても、子どもから見れば、親と子の関係は常に（不在の親をも含んだ）「両親との関係」なのである。

このことは、「育てられて育つ」過程に、両親の関係のありようが深く影を落とすことを意味する。例えば、「コペルニクスの転回」一つを取り上げてみても、それが二人の親において同時になされることは難しく、一般的には母親の方が早く、父親が一步遅れるというように、多くの場合にそこに時間差が生まれる。だが、お互いにパートナーのコペルニクスの転回をゆっくりと待つことができればともかく、いち早く転回を遂げることに向かった方は、遅れるパートナーに不満を抱き、それが夫婦間の軋轢になる場合がしばしばある。図に描けば「時間差」に過ぎなくとも、そのことに端を発して三者での生活がきしみ始め、お互いの抱く不満や葛藤が離婚に繋がったり、あるいは子どもの虐待に通じたりする場合さえ生じ得る。前回の図に示した親の「コペルニクスの転回」は、いまのような夫婦間の関係の軋轢を含んだものとして考えられなければならないのである。

そのように考えれば、子どもの「育てられて育つ」過程は、両親のあいだの関係のありように翻弄される危うい綱渡りのような過程であることが見えてくるだろう。親と子の関係は、幸せな局面を多数含みつつも、その背後に常に葛藤を抱えた関係なのである。

2) きょうだい関係を考える必要がある

第二に、多くの子どもにはきょうだいがあり、そのきょうだい関係はいうまでもなく当の子どもの生涯発達過程に大きな影響を及ぼす。とりわけまだ幼い時期に下に弟妹が生まれた場合、上になる子どもはそれまでの自分中心の世界が大きく変わり、世界の中心からはずされるような寂しい気分を味わう一方で、上になることに誇らしい気持ちを抱くというように、複雑な思いに駆られる（後段のエピソードを参照）。つまり、下の子に焼きもちを焼いたり、赤ちゃん返りをしたりする一方で、下の子の面倒を見るなどの上の子らしい振る舞いも見られるというように、子どもは正負両面の心の動き経験し、それが人としての大きな成長の機縁にもなる。そのようなきょうだい関係を念頭に置けば、前回の図は「子どもの誕生」のすぐ後に、もう一つの命の誕生があり、そこから線が右に延びていく可能性があるということになる。そしてそのきょうだい間の線と線のあいだにも、親子間のそれとは明らかに違うにせよ、影響を及ぼしあう関係が生まれるのである。そのような可能性が前回の図では省略されていることを見ておかなければならない。

3) 広義の育てる者の存在を考える必要がある

第三に、早期から日中の養育の大半を保育の場で受ける子どもたちが多数いることも、「育てられて育つ」ということが親子間だけの問題ではないことを示唆する。というよりも、太古の昔から、親だけによって育てられる子どもはいなかったといっても過言ではない。大家族で生活していた時代には、両親や祖父母以外にも、親類縁者や近隣の人が育てる営みに関与していたのであり、現代は、それらの大人たちの代わりに、「保育者」がクローズアップされているのだと考えることもできるだろう。そして両親の育てる営みは、周囲の大人たちの広義の育てる営みと深く結びつき、そこからの影響を強く受ける

要するに、時代を問わず、子どもは自分の生活のなかで出会う多くの大人たちや周囲の子どもたちの影響を受けて「育てられて育つ」のである。幼児期、学童期と年齢が上がれば上がるほど、保育者や教師など周囲の大人の影響はもちろん、同じ年恰好の子どもたちとの関係の影響もまた大きくなることはいうまでもない。とりわけ親が離婚や病気や犯罪などによって<育てる者>として機能しなくなった場合にも、子どもは乳児院や児童養護施設や保育所などの大人たちによって「育てられて育つ」ということも視野に入れておかねばならない。

以上の1)から3)の議論から分かるように、旧い関係発達概念図では、「育てられて育つ」という中身が血縁ベースの3世代の関係に矮小化されて理解されかねないところがあった。それはまた、「育てる」という営みが、親の育てる営みに矮小化されて理解されかねない危うさがあったということでもある。今回の図で外周の楕円を描き加えることによって、子どもが「育てられて育つ」その実相にいま一歩近づけたのではないだろうか。

．．．．

という調子で、これまでの議論を批判的に吟味しながら、「子どもは育てられて育つ」というテーマにより密着して行きたいと思っている。こういう議論の基になっているのが、多数の保育者が提示してくれるエピソード記述である。本日はその中から、4人の保育者の描いたものを紹介しておきたい。

7. 4人の保育者の描いたエピソードから

エピソード1：弟をたたくMちゃん

S保育士

<背景>

Mちゃんは2歳の女児である。1ヶ月前に弟が生まれた。「Mん家、赤ちゃんが生まれたよ」と何度も嬉しそうに話したり、それまでは小さいクラスの子どもに関心を示さなかったのに、自分から声をかけ、手を繋いで歩いてあげたりする姿も見られるようになり、弟が生まれたことを嬉しく思っているのだなと感じられた。その一方で、ときどきふいに心細そうな表情を見せたり、急に甘えてきたりすることもあり、やはり不安もあるのだろうと思われた。弟が生まれてちょうど1ヶ月経ち、母が始めて弟を連れてMちゃんを送ってきた朝の出来事である。

<エピソード>

朝の登園時間、私が保育室で受け入れをしていると、Mちゃんが一人で部屋に入ってきた。「Mちゃん、おはよう！」と声をかけ、Mちゃんの後ろを見るとお母さんが赤ちゃんを抱っこして入ってきた。「わあっ！お母さん、久しぶり。おめでとうっ！赤ちゃん見せて！」と言って駆け寄ると、他の保育士も周りの子どもたちもみんなが一斉に集まってきた。お母さんがみんなによく見えるように、赤ちゃんを抱いたまましゃがんでくれたので、「わあ～、かわいい！」とみんなはお母さんと赤ちゃんを取り囲んだ。しばらくのあいだ、みんなが赤ちゃんに注目し、赤ちゃんの話題で盛り上がっていた。

Mちゃんは返却するためにもってきた絵本を手にとって、赤ちゃんの足元の位置に立っていたが、その絵本で赤ちゃんの足の辺りを、おくるみの上からぽんぽんとたたき始めた。それは、痛くしようとしているわけでもないが、好意的でもない、微妙な感じのたたき方だった。お母

さんは怒るわけではなく優しい口調で「いたいいたいよ、やめてな」とさらっと言ったが、Mちゃんは止める様子ではなかった。強いたたき方でもなく、一見、Mちゃんが意識的にしているようにも見えなかったもので、それ以上は誰も何も言わず、また赤ちゃんの話題に戻っていった。

ふとMちゃんの顔を見ると、半分怒ったような、半分寂しそうな、なんともいえない表情をしている。「かわいい、かわいい」と赤ちゃんのことばかり言っていた私は、Mちゃんの表情にはっとした。そしてMちゃんを抱き寄せて、「赤ちゃん、かわいいねえ、Mちゃんみたいにかわいいねえ」と言った。Mちゃんはにっこり笑ってうなずくと、「これ、読んで」と持っていた絵本を差し出した。私は赤ちゃんを囲む輪から離れ、Mちゃんに絵本を読んであげた。

<考察>

下の子どもが生まれると、誰もが大人より小なり複雑な気持ちをもつものである。新しい家族を迎えるために、誰もが通る道であり、乗り越えていかなければならないものである。とはいえ、そのときその子が、自分が忘れられたような、寂しく不安な思いをしていることも事実である。Mちゃんも弟はかわいい、でも憎らしい・・・という複雑な思いを抱えているのだろうと思う。生まれたばかりの弟を大事な家族の一人として受け入れていくには、自分も大事だと思われているという自信が必要である。Mちゃんが弟を受け入れていくために、周りの大人が応援できることは、Mちゃんのことは忘れていないよ、今までと変わらず大事なMちゃんだよ、というメッセージを送ってあげることだと思う。

エピソード2：新しい家族の誕生

T保育士

<背景>

Nちゃんは5歳の女児である。日頃からおしゃべりが好きで、友達とも元気に遊んでいる。母ひとりと子ひとりの母子家庭で、きょうだいがいないせいか、年長さんになってからはよく園で赤ちゃんを抱っこしてくれたり、可愛がったりしてくれている。その反面、可愛がり方に一方的なところも見られ、また時折、ふと寂しそうな表情を見せたり、暗い表情になったりしていることがあって、私はNちゃんのそんな様子がずっと気になっていた。

<エピソード>

午前中の戸外での遊びのときである。私が花壇の雑草取りをしているところにNちゃんがやってきて、「先生、嬉しいことがあったんだよ、先生、お母さんにも他の先生にも内緒だよ」という。そこで私が「どうしたの?」とわくわくした気持ちで尋ねると、「お母さんのお腹に赤ちゃんがいるんだよ!」と満面の笑顔と弾んだ声で答える。私はNちゃんのところが母子家庭であることが分かっていたので、Nちゃんの言葉に一瞬どきとしたが、Nちゃんの笑顔に思わず「よかったね!おめでとう!Nちゃん、お姉ちゃんになるんだね!」と言ってしまった。

私が言い終わる間もなく、Nちゃんは「お父さん、祐二って言うんだよ、祐ちゃんと言ってもいいんだって、先生も祐ちゃんって呼んでもいいよ」と興奮気味に言う。これまで二人暮らしだったMちゃんに新しい家族が誕生したことで、会話が盛り上がった。いままでみせていた暗い表情とは打って変わって、これからの生活に希望を抱き、心躍る様子が手に取るように伝わってきた。

私はお父さんのことには触れずに、「赤ちゃん、楽しみだね、元気な赤ちゃんが生まれますようにって、神様に祈っておくね、素敵な嬉しい内緒話、ありがとう」と伝えて、二人で一緒に保育室に戻った。

後で他の先生方にいまのNちゃんの話伝えと、Nちゃんは他の先生たちにもすでに話していたようで、そんなことからNちゃんの計り知れない喜びが伝わってくるようだった。

<考察>

Nちゃんの喜びに接することで、これまでNちゃんが母子家庭という環境で味わってきた寂しい気持ち、両親が揃った家庭を夢見る気持ちがかえって分かるような気がし、胸の痛む思いに駆られた。内緒話だよというNちゃんの心躍る思いにただただ共感していた私だったが、少し冷静になってみると、これから、母親の出産、結婚、子育て、4人での暮らしと、Nちゃんの生活が大きく変わり、この先、いろいろと大変なこともあるだろうなと思わずにはいられなかった。それでも、いまの喜びを一緒になって喜んでくれる人をNちゃんが求めているのだと思い直し、このNちゃんの喜びの瞬間を理屈ぬきで一緒に喜ぼうと思った。

エピソード3：こんな部屋、出ていったるわ

<背景>

もうじき6歳の年長男児Sくん。3歳下に弟がいる。とても複雑な家庭事情を抱えているせいか、クラスの中で乱暴が目立ち、担任として困ることが多い（弟にも噛み付き等の乱暴が目立つ）。母親は薬物依存からくる精神障害があって、いまま病院に通っている。気分が浮き沈みが激しく、Sくんにもしょっちゅう手を挙げているらしい。あるときお迎えの折に、「こいつのせいで私の頭がおかしくなる」と言って、私の目の前で叩くこともあった。Sくんの実父とは3年前から別居し（父親が家を出て行った）、1年前に新しい父親ができたが、この人も最近家を出たので、それ以来、母親の精神的不安定はいつそうひどくなっている。母親は就寝が遅く、朝も遅いので、兄弟の登園が昼近くになることもしばしばである。私の園は異年齢保育をしている。

<エピソード>

朝のお集まりのとき、Sくんの隣に座った4歳児のKくんがアニメのキャラクターのついたワッペンを手を持っているのに気づき、「見せろ」と声をかけると強引に取り上げようとした。Kくんが体をよじって取られまいとすると、SくんはKくんの頭をパシーンと叩き、立ち上がってKくんのお腹を蹴り上げた。大声で泣き出すKくん。あまりの仕打ちに、私はSくんの思いを受け止めるよりも先に、「どうしてそうするの！そんな暴力、許せへん！」と怒鳴ってしまった。くるっと振り返って私を見たSくんの目が怒りに燃えている。しまったと思ったときはすでに遅く、Sくんは「こんな保育園、出ていったる！」と肩を怒らせて泣きべそをかき、部屋を出て行こうとした。私は出て行こうとするSくんを必死で抱きとめて、「出て行ったらあかん。Sくんはこのクラスの大事な子どもや！」と伝えた。泣き叫び、私の腕の中で暴れながらも、抱きしめているうちに少し落ち着き、恨めしそうな顔を向けて、「先生のいいひんときに、おれ、死んだるしな」と言った。

私とSくんのやりとりを他の子どもたちが不安そうに見ていたので、「みんな、朝の会やのにごめんな、いま先生、みんなに大事な話したいねん」と子どもたちに声をかけた。そしてSくんを抱き止めたまま、子どもたちに「みんなSくんのことどう思った？」と訊いてみた。子どもたちは、「SくんがKちゃんを叩いたんは、やっぱりあかんと思う。そやけど、Sくんはやさしいところもいっぱいある」。「大事なぞう組の友達や」。「朝も一緒に遊んで、めっちゃ面白かったし、またSくんと遊びたい」。「出て行ったらあかん、ここにいて」

と口々に言う。私が心配しているのとは裏腹に、子どもたちは S くんを大事に思う気持ちを次々に伝えてくれた。私は涙が出るほど嬉しかったが、ふと気がつくと、S くんが私の体にしがみつこうにしている。そこで、子どもたちにお礼を言って、「S くんが先生に話があるみたいやし、今日は朝の会は終わりにして、みんな先に遊んでいてくれる？」と声をかけた。

子どもたちが園庭にでて室内で二人きりになると、S くんは「あのな、うちでしばかれてばっかりなんや。うち出て行って、反省して来いって、いつもいわはる。出て行って泣いたら怒られるし、静かに反省したら、家にいれてくれはるんや」と話し出した。私は「そうやったんか、S くん、しんどい思いしてたんやな」と言って S くんを抱きしめた。「先生は S くんのこと大好きや、先生が嫌いなことしてるか？」と言うと、「人を叩いたり、蹴ったり、悪いことすることやろ？」と S くん。「遊びに行く」と立ち上がると、「K ちゃんにごめんいうてくるわ」と言って走って園庭に向かった。

<考察>

S くんが難しい家庭事情にあることは十分把握していたはずなのに、あまりにもひどい暴力だったので、かっとなってみんなの前で不用意に叱ってしまった。集団で S くんを責める結果になり、「出ていったるわ」「死んだるわ」と言わせてしまったのは担任としての私の大きな反省点である。けれども、周りの子どもたちの優しさに助けられ、クラスの大切な一員であることを S くんに伝えることができてほっとした。

二人きりになったときの S くんの話は、本当に胸の詰まる思いがして、「しんどい思いしてたんやな」としか言えなかった。S くんが厳しい家庭環境の下で健気にも一生懸命生きていることがひしひしと伝わってきた。

そういう S くんが少しでも落ち着いて家に帰れるよう、保育園では S くんの辛い思いをていねいに受け止めて、S くんがみんなと同じ大切な存在であることを伝え続けていきたいと思った。

エピソード 4 : 「生きてる音」

M 保育士

<背景>

D くん（4 歳）と M ちゃん（6 歳）は、4 人兄弟の 2 番目と 3 番目の姉と弟。とても明るく、朗らかな姉弟で、小学 2 年生の長女、2 歳の三女と仲良く遊んだり、けんかをしたりと家庭でのほほえましい様子をこまめに保護者が連絡帳等で伝えてくれる。父母も大らかな子育てをなさっており、子どもたちのやりたいことを面倒がらずにやらせてあげている姿をかいま見ることも多く、頭が下がることもしばしばだ。そんなことが影響しているのか、D くんは発想がおもしろく、おもしろいことを言ってびっくりさせられたり、笑わされたり、感心させられたりすることがしょっちゅうある。しかし父が最近大病を患い、手術・入院と続き、子ども達もその間寂し気だったり、甘えてきたりすることが時々見られた。父の退院後はまた元気な笑顔を多く目にするようになり安心していた。私は今は主任という立場で、朝夕しか一緒に遊ぶ機会がなく、寂しさを感じながらも、この D くんや M ちゃんたちのユニークな発言を耳にするたびに、かわいいなとほのぼのとした気持ちになっていた。父が手術した後、「おなかに傷がある」と D くんが目を丸くして私に教えてくれたが、心配そうな表情も見られたので、「とうちゃん早くげんきになったらいいねえ」と

話をしたりしていた。

<エピソード>

冬の寒いある朝、登園してきたMちゃん、Dくんと3人で「寒いね～」と言い合って室内で体をくっつけたり、さすったり、だっこしたりして遊んでいた。Dくんが、座った私の膝に立っておしゃべりしている時、ちょうどDくんの心臓が私の目の前にあり、耳を押しあてると、トクトクと心臓の鼓動が聞こえてきた。「Dくんの心臓の音が聞こえるよ」と言うと、Mちゃんに教え、Mちゃんも耳を押しあてて「ほんとだ！『生きてる音』がする！トトトってする！」それを聞いたDくんはMちゃんと交代してMちゃんの鼓動を聴いて「ほんとだ！『生きてる音』だ！父ちゃんの音と一緒にだ！」と目を輝かせた。Mちゃんも「父ちゃんの音と一緒にだ。父ちゃんお腹を切ったけど、元気になったからこの音がするよねえ。」と2人で上気した顔を見合わせて言い合っていた。2人の明るく嬉しそうな表情を見て、「父ちゃん元気になってよかったねえ。」と私も心から2人に言うと、「うん！」とわずき、しばらくまた3人で心臓の音を聴きあって遊んでいた。

<考察>

何かの折りに家庭で父親の心臓の音を聴かせてもらったり、心臓の音が「生きている証」というような話を聞いたりしたのだろうか。鼓動＝「生きている音」＝父親の命という連鎖が2人の共通の思いとして心にあることにびっくりしたり、感心したりした。当たり前のことだけど、ひとりひとりに心臓があり鼓動を続け、かけがえのないたったひとりの存在としてここにいることやそれぞれが体の中で「生きてる音」を刻み続けていること。その命の愛しさ、大切さを改めてひしひしと感じた2人との会話だった。子どもが成長するにしたい、まわりのおとなはいろんな欲が出てこうなって欲しいとか、もっとこうして欲しいとか願ってしまいがちだと思う。私自身気がつけば、いつも何かを要求していることに思い至り反省することが多い。子ども達をそんなふうに見るのではなく、子どもの命そのものを愛おしいと思うおとなになりたいとつくづく思う。

<当日配布資料>